

YAMAHA

ヤマハCPの系譜

ステージピアノの源流を探る

cp



YAMAHA

ヤマハ CP

の系譜

ステレジピアノの源流を探る

今でこそデジタル・サンプリングしたリアルなピアノ・サウンドが当たり前のステージ・ピアノ。しかしその元祖は、1976年に登場した、グランド・ピアノの構造にピックアップを付けたエレクトリック・グランド・ピアノ“CP-70”だった。現在でもシンセなどのプリセットにその名を残しているので、当時を知らない世代でも“CP”的響きになじみはあるのではないだろうか。たちまち一世を風靡したこの機種は非常に多くのミュージシャンに使われ、幾度かのモデル・チェンジを重ね、1つの時代を築いていく。また“CP”的名を冠してはいても、エレクトリック・グランドとは全く別の、いわゆる“電子ピアノ”タイプのラインナップも同時にリリースされていく。ここはそんなヤマハCPシリーズの系譜をたどり、その時代、その音、そしてその魅力を探っていこう。

Part1

ヤマハCP-70/80と、その時代

～The age of YAMAHA CP～

page.4

Part2

時代を席巻した名機の構造とは?

～What's YAMAHA CP?～

page.6

Part4

CPで奏でられた名演を聴く

～Recommended CP music～

page.14

Part5

今、CP音色をどう使う?

～Find your new style with CP sounds!～

page.16



Part1

ヤマハCP-70/80と、その時代

文:高山博

~The age of YAMAHA CP~

ステージ・ピアノの歴史に革命をもたらし、一時代を築いたCP-70/80。

その登場前夜から今にいたるまでの歴史を振り返ってみよう。

CP-70/80登場前夜

いつの時代でも、ピアノは、ロックやポップスに欠かせない楽器だ。弾き語りはもちろん、転がるようなロックンロール・ピアノからプログレのクラシカルなフレーズまで、さまざまなジャンルで大活躍している。とは言うものの、バンド・サウンドにピアノを導入するのは、なかなか難しい。特に、セッティング時間も楽器のレイアウトも限られるライブでの使用は大変だ。

まず問題になるのが、その団体のデカさ。グランド・ピアノとなれば、小さなものでも全長は2m近くになり、重量も200kgを超える。本格的なコンサート・グランドとなればさらに巨大だ。到底マイ・ピアノを持ち歩くわけにはいかないし、セッティングにも人数が必要となる。

さらに厄介なのは、そのサウンドのつかまえにくさだ。バンドと一緒にやるからには、PAを使ってスピーカーから音を出さなければいけない。大きなボディに何百本もの弦が張ってあるピアノのサウンドをすべてキャッチするには、レコーディングでそうするように、複数のマイクをある程度離れた位置に立ててやる必要がある。ところが、そうすると、ほかの楽器の音が回り込んでしまう。ピアノの音を大きくしようとしても、マイクに入り込んだドラムやギターと一緒に大きくなるのだ。また、そういった状態では、ハウリングも起きやすくなる。結果、十分な音量を確保できることになりやすい。

もちろん今でも、ピアノ弾き語りなどアコースティック・ピアノの音を大切にしたい場合には、マイクを使うことも珍しくない。有能なエンジニアは2本程度のマイクでピアノの音をうまくとら

◀ピアノのレコーディング風景。
ピアノの音を十分にとらえるには、
このように複数のマイクが必要（撮影:大町信也）

◀ピアノのレコーディング風景。

えるし、ピアノ用に開発されたピックアップ型のマイクもある。しかしそれらが用いられるのは、ほかの楽器の音量が小さかったり、アコースティックのみのアンサンブルの場合が多く、大音量のバンド演奏などではやはり難しいのも事実。実際、セッティング時間にもステージ・サイズにも制限のあるライブハウスでの演奏では、バンドの音量にピアノが負けてしまい、悔しい思いをしたプレイヤーも多いだろう。

CP-70登場!

1950年代から70年代、バンドの時代が始まるとともに、このような困難を解決すべく、さまざまなステージ・ピアノが考案されていく。今ではその独特的なサウンドが評価されているフェンダー・ローズもそういった製品の1つだし、RMIエレクトラピアノのような電子式によるピアノも登場する。しかし、弦の代わりにトーン・バーで発音する電気ピアノや、当時アナログ方式だった電子ピアノでは、やはりサウンドが違い過ぎて、アコースティック・ピアノを直接代替することはできなかった。

そんな中、“満を持して”といった感じで1976年に登場したのが、ヤマハCP-70だ。エレクトリック・グランドと名付けられたように、発音機構は基本的にピアノと同じ、ハンマーで弦を叩いて鳴らした音を、専用のピックアップで拾い出力する方式を持つ。とにかく、音を出す心臓部分がグランド・ピアノと同じなので、サウンドもそれまでとは大違い。初めてアコースティック・ピアノと同等の音がするステージ・ピアノが登場したとして、大きなセンセーションを巻き起こした。



◀CP-70/80は、2つに分割して持ち運びが可能
(当時のヤマハ・カタログより)

YAMAHA CP TIME LINE

ヤマハCP

1976



- エレクトリック・グランド・ピアノCP-70発売
- エレクトロニック・ピアノCP-30発売

1977

●CP-20発売

1978

- CP-70B発売
- 88鍵を備えたCP-80発売

1979

●CP-10発売

1980

●CP-10

ヤマハ製品と
技術革新

世相

- ロッキー事件
- ベトナム社会主義共和国成立
- 家庭用VHSビデオテープレコーダー発売

★PASS（デジタル音源）登場

音楽シーン

- 「あの日にかえりたい」荒井由実
- 「おけないやきくん」子門真人
- 「ペッパー警部」ピンク・レディー

- 「勝手にしゃがれ」沢田研二
- 「ストレンジャー」ビリー・ジョエル
- 「ていーんす ぶるーす」原田真二

- 「UFO」ピンク・レディー
- 「勝手にシンドバッド」ザザン・オール・スターズ
- 「みずいろの雨」八神純子

- 「YOUNG MAN (Y.M.C.A.)」西城秀樹
- 「さよなら」オフコース
- 「ビューティフル・ネーム」ゴダイゴ

- 「異邦人」久保田早紀
- 「ダンシング・オールナイト」もんた&ブラザーズ
- 「ライディーン」YMO

しかも、単にグランド・ピアノにピックアップを付けただけではない。さまざまな工夫により、小型化、軽量化が図られているのも大きな特徴となっている。特に開発された弦により、弦長は非常に短く抑えられ、また通常3本張られる中高音部の弦の本数もすべて2本ずつ、またハンマー・アクションも一部簡略化されている。ボディはケースを兼ね、移動時には鍵盤部と弦の部分を分割できる。全体の重量は100kgを超えるが、こういった構造により、通常の楽器車でも十分に移動可能になったのだ。

さらに、肝心の音色についても、先のような軽量化、小型化による独特的な個性の加わったものになっている。弦長が短いことやボディによる共鳴がないことから、通常のピアノよりサステインが短く減衰が速い。そうでありながら、ピックアップの位置と特性により、ハンマーによる打撃音は抑えられていて、高域はまろやか、低域も極端に暴れることがない。すっきりと整理されたサウンドは、ライブでほかの楽器をマスクすることもなく、レンジもPAで扱いやすい範囲に抑えられている。独特の軽く粒立ちの良いサウンドは、80年代当時のフュージョンやニューミュージックといった爽やかで分離の良いサウンドにぴったり。単に、ステージ上でのグランド・ピアノの代替品という位置にとどまらず、独特的CPサウンドが、さまざまなアーティストの愛用するところとなった。

CPのラインナップ

73鍵仕様のCP-70は、小型であることや、ロックやポップスには73鍵でもほとんど支障のないことから人気機種となった。そして、CP-70はほどなく、外部電源使用のCP-70Bにリファインされる。このCP-70Bは、CPの代名詞とも言える機種で、当時非常によく用いられた。加えて、このCP-70Bが登場した1978年には、グランド・ピアノと同じ88鍵盤使用のCP-80も発売された。

CP-70/80は、10年以上にわたってロングセラーを記録する。この間、エレクトリック・グランドという基本設計は変わらないものの、少しずつ機能強化されていった。末尾にDの付くモデルは7バンドのグラフィック・イコライザーを搭載。末尾にMの付くモデルは、さらにMIDI OUTも装備する。また、弟分として、アップライト型のCP-60Mも登場、練習スタジオなどでよく見かけたものだ。

さらに、CPシリーズには、打弦式ではないモデルもある。CP-70と同時に発売されたCP-30がそれで、アナログ発振式による電子ピアノだ。プリセットには、3種類のピアノのほか、ハープシコードがあるのが電子ピアノならではと言える。音色は、さすがにピアノともエレピともつかないものだが、2系統の音

色をブレンドできるなど、工夫が凝らされていた。この電子ピアノのシリーズは、廉価版のCP-20/10を経て、さらに進化したCP-35/25、CP-11へと続く。歴史的にも、最後のアナログ電子ピアノと言えるもので、むしろ今だからこそ、その味が評価されるべき機種と言えるかもしれない。



▲CP-20のパネル部分。4つの音色タブレット（ピアノ1、ピアノ2、ハープシコード1、ハープシコード2）を備え、それぞれを組み合わせることも可能（撮影：菊地英二）

そしてデジタルCPへ

愛好されたCP-70/80シリーズだったが、90年代にかけて、デジタル・サンプリングによるピアノが登場すると、ステージ・ピアノとしての役割を徐々に経えていく。2006年、久しぶりにCPの名を復活させた、ヤマハCP300/33も、デジタル方式の、AWM音源を採用している。

こういったデジタル方式のステージ・ピアノは、軽量でセッティングが容易というメリットに併せ、サウンド面でも、グランド・ピアノに近いたっぷりとしたサステインや低音から、ハンマー・ノイズを強調した硬く抜けの良い音まで、幅広いバリエーションを実現できるのがメリット。現在のステージ・ピアノでは、曲調やジャンルに合わせて、さまざまなピアノ・サウンドを選択して使用するのが当たり前になっている。

そして、そのようなピアノ・サウンドのバリエーションの1つとして、今でもCP-70/80のサウンドは健在だ。CP-70/80の音色は、なんといっても80年代風のアレンジや、レパートリーを弾くにはベストマッチ。また、バンド・サウンドを邪魔せず、すっきりとしたアンサンブルに仕上げるにも、実に良くできた音色なのだ。通常のアコピでは重過ぎる、あるいは目立ち過ぎる、といったときに、CPの音色はちょうど良い選択肢となる。

手持ちの音源やピアノのプリセットを、ぜひチェックしてみてほしい。エレクトリック・グランドや、エレクトリック・アコースティック・ピアノなどで、あのCP-70/80のサウンドに出会えるはずだ。



Part 2

時代を席巻した名機の構造とは?

～What's YAMAHA CP?～

ステージ・ピアノの代名詞とも言えるヤマハCPには、新旧・大小さまざまなモデルが存在し、その音源方式もさまざまである。その中で最も有名なモデル、打弦式エレクトリック・グランド“CP-70/80”シリーズを中心に、主なモデルの構造を掘り下げてみよう。

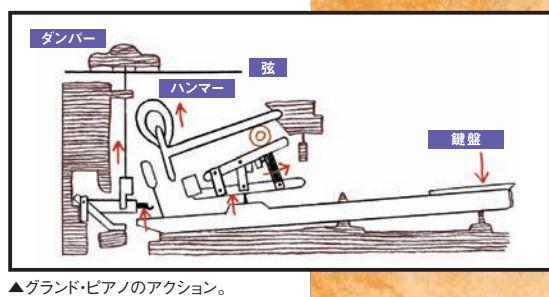
文：安藤 岳志（池部楽器店鍵盤堂）

撮影：菊地 英二

イラスト：小山 牧子

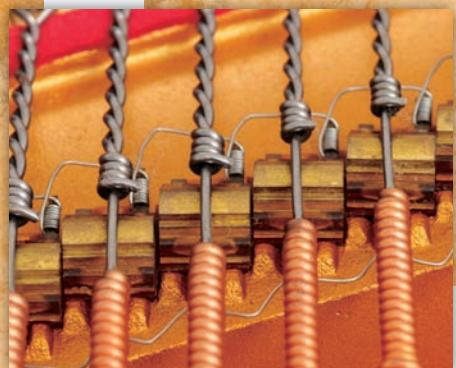


CP-70/80 (CP-60M)



▲グランド・ピアノのアクション。

恐らく、大多数のキーボーディストが“CP”と聞いて思い浮かべるのが、このCP-70（73鍵）、CP-80（88鍵）だろう。外見のとおり、その内部の構造、発音原理については限りなくグランド・ピアノのそれに近い。グランド・ピアノとCP-70/80との関係は、アコースティック・ギターとエレクトリック・ギターの関係に置き換えて考えてみると分かりやすい。エレクトリック・ギターの基本的な発音のメカニズムは共通だが、前者は空洞となったボディで弦の生音を



▲各弦の下に設置された圧電式ピックアップ。▼ピックアップ、コントロール系のエレクトロニクス回路はすべて上部フレーム側に集中して搭載されているため、鍵盤部とは物理的に固定するだけで、相互にケーブルなどを接続する必要はない。



▲グランド・ピアノと同様のCP-70/80の鍵盤のメカニズム。鍵盤に連動して動作するハンマーが、上部に張られた弦を叩いて発音する。

共鳴させて音量を増幅させているのに対し、後者は弦を響かせる構造の代わりにピックアップで音を拾い、外部のアンプで音を出すことを前提とした構造となっている。

CP-70/80も、スチール製のフレームに張られた弦を、鍵盤に連動したハンマーで叩いて発音するところまではグランド・ピアノと基本的に共通だ。しかし、CP-70/80は、その弦の音を増幅する“響板”を持たないために、生音は非常に小さい。その代わりに各弦に取り付けられた圧電式のピックアップがその振動を拾い、外部の再生装置にて初めて大きな音として出力されるのである。この結果、ピアノならではのサウンドを、周囲の音のカブリやハウリングの心配もなく大音量で再生することが可能になったのである。



ただし、本体のサイズをコンパクトにしつつ、必要なテンションと音域を稼ぐため、ピアノでは通常中高音域で1音につき3本ずつ張られている弦が2本ずつとなっており、低音部も1本しか張られていない音域がピアノより広い。この結果、この部分のサウンドはアコースティック・ピアノよりもシンプルな独特のニュアンスを持ち、ピックアップの癖とともに“CPのサウンド”を決定付ける重要な要素となっている。また、3バンドのイコライザーやトレモロ回路を搭載しているのもCPの特徴だ。



▲ステージ・ピアノらしく、キャノン(XLR)端子が用意された出力部。その下の1/4"端子とは異なり、XLR端子はPAへの送り専用のためコントロール・パネルのボリュームとは連動していない。ピックアップ出力はモノラルだが、トレモロ・エフェクト時にはステレオ・バージョンの効果が得られるため、出力は2系統のステレオ仕様となっている。

このように、発音部分の構造についてはまさに“エレクトリック・グランド”と呼ぶにふさわしいCPだが、最も大きな特徴はその筐体の構造にあると言ってもいいだろう。CP-70/80は、鍵盤部分とフレーム部分を分割し、ペダルや脚部、電源などの付属品とともに2つのケースに収めることができる。この結果、グランド・ピアノよりもはるかに容易に運搬が可能となった。ただし、こうした構造によるものためか、鍵盤のタッチはピアノに比べて独特の重さがある。



1970年代に発売されたそのほかのCPは、打弦式ではなく、電子発振音をもとにしたアナログ音源を持つシリーズである。当然CP-70/80のサウンドとは全く異なるキャラクターを持つ“エレクトロニック・ピアノ”である。

基本的な構造は、1基のマスター・オシレーターと平均律分周ICによって全鍵分の音階を持つ元波形を生成し、プリセット式のフィルターとVCAなどによってピアノやハープシコード風に音色を加工するという、電子オルガンやアナログ・シンセに近いものだ。もちろんその音色自体も、“アナログ・シンセで作ったピアノ的な音色”であって、決してピアノの代用として十分なものではなかった。



▲CP-80の鍵盤左手側に位置するコントロール・パネル。左からエフェクト・ループ、ボリューム、3バンドEQ、ブリリアンス・レベル、トレモロON/OFF、トレモロのレートとデブス。



▲ACアダプターの接続端子も信頼性の高いキャノン端子を使用している。



▲CP-70M/80Mと同時に発売されたアップライト・タイプ、CP-60Mのコントロール・パネル(作りはCP-70M/80Mと同じ)。赤い電源スイッチから右へ順にボリューム、EQのON/OFFスイッチと7バンドのグラフィックEQ、エフェクト・ループのON/OFFスイッチ、トレモロON/OFF、トレモロのレートとデブス。MIDI機能に関しては、別途ON/OFFスイッチとスプリット設定用スイッチのみが別パネルに用意されている(CP-60Mは電源スイッチ左側、CP-70M/80Mは鍵盤左側)。機械式のダンパー・ペダルに加え、フット・スイッチもMIDIのサステイン用として使用可能だ。

►CP-70/80シリーズのペダル。このように本体とは1本の棒でつながれる。



◀CP-60Mの端子部分。MIDI出力のほか、電源、フット・スイッチ、エフェクト・ループ2系統とアウトプットを備える。



なった。CP-60Mは分割式ではないものの、鍵盤部を下方に折り畳んで本体に収納できるという、これまたツアーアップのギミックを備えていた。このMシリーズが、打弦式CPの最後のモデルである。

リードやトーン・バーを使うローズやウーリッシュなどのエレベー、電子発振式の電子ピアノと比較した場合、“ピアノの代用品”としての完成度は圧倒的にCP-70/80に軍配が上がる。また、その独特なサウンドから、あえてレコーディング時にもCPを使用するアーティストも少なくない。しかし、グランド・ピアノよりもはるかに軽いとはいえ100kgを超える重量、ピアノと同様の調律の必要性といったネガティブな要素はいかんともし難く、圧倒的にコンパクトで十分にリアルなPCM音源の台頭によってCP-70/80は第一線から退いていくことになるのである。

◀鍵盤部分(下半分)とフレーム部分(上半分)の結合はこのようにシンプル。その左側にはキャリー用のハンドルも。

その他の
CPシリーズ



このシリーズの中でも人気の高いCP-30は、3種類のピアノとハープシコードの4つの音色を持つ音源を2系統内蔵しており、それらを組み合わせたりデチューンしたりすることで生まれる多彩な音色により人気が高い。2分割されたフタがそのままスタンドとして機能するなど、移動のしやすさを考慮した設計は打弦式のCPにも通じるコンセプトだ。CP-20/30は、のちに発展モデルであるCP-25/35に進化する。CP-25/35は演奏されたノートを音源に割り振るプロセッサーを備えたキー・アサイナー回路を搭載したパルス波音源を採用、エンベロープによる減衰のコントロールが可能になった。CP-30同様に2系統の音源を持つCP-35では、減衰(ディケイ)を個別に設定できること

から、アタック時とディケイ時で音色を変化させる、といったさらに繊密な音作りが行える。また、ワンタッチで音色を切り替えることができるプリセット機能やEQ/トレモロに加えてフランジャーも内蔵している。

また、1980年代初頭には、のちのポータブル・キーボードにつながる自動伴奏機能やスピーカーを備えたCP-11などの製品も登場している。

▲CP-30



吉澤はじめ

撮影:八島崇

ジャズ・ピアニスト、吉澤はじめはヤマハCPを愛しているミュージシャンの1人。彼のプライベート・スタジオ“オグスタジオ2”には、グランド・ピアノやローズ、ウーリッツァーと並んでCP-70がセットされている。ここでは吉澤に自身のCPへの思いを語っていただいた。CP-70の魅力をぜひ感じてほしい。

PROFILE●1989年渡米。91年、叔父であるピーター・アースキンとともにソロ・アルバム『HAJIME』を制作し、イギリス・デビューを果たす。その後、Mondo GrossoやCOSMIC VILLAGEへの参加を経て、現在はSLEEP WALKERのメンバーとして活動するほか、多くのアーティストへの楽曲提供、アレンジ、演奏、プロデュース等を行っている。ソロ作はこれまでに6枚発表。2008年12月10日には最新ソロ・アルバム『INNOCENT NOCTURNE』をリリース。

●吉澤さんはヤマハCPのどんなところが気に入っているのでしょうか？

●男っぽいところです。それも、ちょっとだけ艶っぽさのある男前って感じが、好きです。さらに言うと、ぶきっちょな感じも好きです。もう少し具体的に言うと、生ピアノに比べて音質が固く、立ち上がりが速くてリリースが短い。つまり、よりパーカッシブな演奏が可能なところです。ザクザク、ごつごつした質感が、どこか無骨で温かみがあります。

●逆に、使いにくいと感じるところなどはあるのでしょうか？

●生ピアノのつもりで、思い切り気持ちを込めてメゾ・ピアノ以下のペロシティを表現しようものなら、思い切り裏切られます。

●曲調やフレーズなど、どんな場面でCPを使うことが多いですか？

●ワイルドだけどおしゃれでキラキラした人になってみたいな、って思ったとき。

●エフェクターなどは使用しますか？

●エフェクターは基本的に使いません。僕は、土っぽいサウンドが得られる初期のモデルが大好きで、新しくなればなるほど、キャラ過ぎて使えないと思っていたので、なるべく生きいままミックスします。

●ということは、吉澤さんが使用しているCP-70のモデルは……。

●（何も付いていない）CP-70です。

●今うかがったようなCPの音色が実際に聴ける曲を教えていただけますか？

●SLEEP WALKER「INTO THE SUN」、HAJIME YOSHIZAWA「COLONY」（『Violet Lounge』収録）、HAJIME YOSHIZAWA「SWEET WAY」（『Music From The Edge Of The Universe』収録）などです。

●ちなみに、吉澤さんがお持ちのCP-70はもともとキーボード・マガジン編集部にあったものだそうですね。いつごろ、どのような経緯で吉澤さんの手に渡ったのですか？

●確かな期日は思い出せませんが、10年ほど前、僕がCOSMIC VILLAGEというバンドをやっていたころ、新製品レビューでのビデオ制作の仕事を『キーボード・マガジン』からいただいた際に、スタジオの奥に申し訳なさそうに置いてあったCP-70を僕が発見し、“これは誰のものですか？”と質問したのがきっかけだったと思います。

▼吉澤のプライベート・スタジオ“オグスタジオ2”に鎮座するCP-70。



Part 3

ヤマハCP・ギャラリー

～Do you know all models?～

撮影: 菊地英二 (P12-13除く)



CP-80

1978年に発売された88鍵モデル。
73鍵モデルよりも弦長を長くし、よりピュアで自然な音色を実現した。機能的な部分ではCP-70Bと変わらない。
当時の価格は800,000円。

CP-60M

1985年に登場したアップライト・モデル。
CP-70M/80Mと同じくMIDIと7バンド・
グラフィック・イコライザーを搭載。鍵盤部
分はボディ内に収納できるように設計さ
れていた。当時の価格は460,000円。



Part 3

ヤマハCP・ギャラリー

~Do you know all models?~



CP-11

打弦式のラインではなく、電子発振音をもとにしたアナログ音源電子ピアノラインの機種。自動伴奏機能やスピーカーも備えていた。のちにパネルも木目調のCP-11Wも登場。1981年発売当時の価格は85,000円。



CP-20

上のCP-11と同じラインにおける第一世代の機種。CP-70やCP-30が登場した翌年の1977年に発売された。76鍵、2系統の音源を備えたCP-30の弟分で、こちらは61鍵、音源は1系統であるものの、CP-30同様4つの音色タブレットやタッチ・レスポンスを装備していた。当時の価格は185,000円。

Part 3

ヤマハCP・ギャラリー ～Do you know all models?～



CP-30

1976年、CP-70と同時に登場したアナログ音源の電子ピアノ。アコースティック・ピアノ同様のタッチ・レスポンスを備えていたほか、音源、音色、ディケイ、ピッチ、トレモロのすべてが2系統で、複雑な音作りが楽しめた。当時の価格は285,000円。



CP-10

CP-30/20の技術をもとに、コスト・パフォーマンスを徹底的に追求した機種。1979年発売時の価格は99,800円だった。上位2機種と同じく4種の音色タブレットを装備した上、5バンドのグラフィック・イコライザーも搭載されていた。

CP-35

アナログ音源電子ピアノ
第二世代の最上位機種。新開発2系統のパルス波音源が採用されており、それぞれに対応する4種類のウェーブ・スイッチで音源波形を決定、さらにフィルター・スイッチで音作りを行える仕様で、プロ専用を謳っていた。1981年発売、当時価格360,000円。



CP-7

1982年に発売された家庭向けの機種。これまでの機種同様4種類の音色タブレットのほか、メイン・エフェクトとしてコーラスや5ワットのスピーカーも2本搭載していた。これを最後に、CPと名の付く電子ピアノは2006年まで登場しない。当時価格70,000円。





Special Interview 現代のCPシリーズについて聞く CP300/33開発者インタビュー

1976年から約10年の間リリースを続け、やがて終焉を迎えたCPシリーズ。しかし、2006年に新たに登場したステージ・ピアノが“CP”の名を冠していたことは、本誌読者ならよく存じだろう。そこで、新生CPシリーズの開発に携わったヤマハ株式会社MPプロデュースグループ所属、井出健介氏に、なぜ“CP”の名が復活したのか、また現代のCPシリーズの開発についてうかがった。

井出氏は過去にMotif ESシリーズ、Sシリーズの開発を担当

●それまでのPシリーズから、CPと名称を変えたのはどのような理由からでしょうか？

●当時Pシリーズは、大別してP-250/P-90とP-120/P-60の2ライン構成でやってきました。前者が主にプロ・セミプロ向け、後者が家庭向けです。しかし、両コンセプトは互いに相反する点がいくつかあり、Pシリーズという1つのラインナップ内で2つのコンセプトを追求し続けていくよりも、前者のラインナップについてはステージ用ピアノとして、より明確なコンセプトを持った製品を開発していかたいという思いがありました。P-250/P-90で目指していたプロ・セミプロ志向と、昔のCPのイメージが同じだったので、これらの後継をCPラインに移行しました。それがCP300/CP33です。これにより、互いに自由に、個々のコンセプトを突き詰めていくことができるようになりました。

●名機“CP”の名を冠しているということで、どんなところがCP-70/80から受け継がれているのでしょうか？かなり時代を経ているので性能面ではあまりないと思われますが……。

●やはりコンセプトを受け継いでいます。“プロがステージで演奏する”という視点で開発しました。

●ちなみに井出さんご自身は、(開発作業とは別に)かつてCP-70/80を演奏したことはあったのですか？

●学生時代に在籍していたジャズ研の部室にCP-70があったので、ソロで弾いたことはあります。でも、ステージ上で、バンドの中で演奏する、という機会はありませんでした。一度はやってみたかったのですが。

●ではもう1つのテーマであるCPシリーズの開発について聞かせてください。まず、新機種の開発というのは通常どのくらいの時間をかけて、またどのような体制で行われるものなのですか？

●開発規模は少人数のスタッフで1年くらいで開発するものから、大人数で何年かかけて開発するものまでさまざまです。

●CP300/33の場合は実際どんな状況だったのでしょうか？

●CP300/33は、2モデルありましたので、少人数のスタッフでというわけにはいきませんでしたが、PシリーズのスタッフとCPシリーズのスタッフの混合チームで、1年くらいかけて開発しました。

●一時代を築いた機種の名称を受け継ぐ新機種の

開発ということで、プレッシャーはありませんでしたか？

●ネガティブな意味でのプレッシャーはありませんでしたね。CP-70/80の後継そのものの開発というわけではありませんでしたので。むしろ、“CPシリーズ”ということで製品イメージがより具体的になり、やるべきことがクリアになりました。

●CP300/33の開発で特に力を注いた点や、苦労した点などを聞かせていただけますか？

●なんと言ってもステージ・ピアノですので、大会場やバンド内での音の鳴り方、そして客席からの見え方、デザインについては気を遣いました。これらには正解はなく、好みとか、その時代の傾向が大きく影響します。長年かけて、ミュージシャンの方々にエバレーションを行ったり、トライを繰り返して培っていく、ノウハウに近い部分ですね。

●一開発者として、新CPシリーズの“ここに注目してほしい！”という点を教えてください。

●やはり、なんと言ってもアコースティック・ピアノの音、そして鍵盤含めた弾き心地です。アコースティック・ピアノを開発している部署ともよくコミュニケーションを取り、彼らとも協力体制を敷いて、細かいところまでこだわり抜いた部分です！

CP300

ライブやバンドでのアンサンブルを重視した性能・機能を誇るステージ・ピアノの最高峰。価格270,900円。



CP33

CP300に比べ重量は約半分、奥行きは約7割という小型・軽量化モデル。価格147,000円。

Part 4 CPで奏でられた 名演を聴く

～Recommended CP music～

ここではCPサウンドが光る名盤をピントで樂器に精通するYANCYにセレクトいただいた。
独特的のサウンドをぜひ味わってみてほしい。

文・セレクション:YANCY



ジェネシス
『そして3人が残った』

EMIミュージック・ジャパン:
TOGP-15013 (DVD付き)

1978年3月に発売されたアルバム。当時メンバーが3人になってしまい“解散か”とささやかれたジェネシスが、そんな噂を振り払うかのように世に送り出しました。ジェネシス・ファンにはいま1つの人気だそうですが、トニー・バンクスの弾くCPがとても良い感じで響いています。ギタリスト、スティーブ・ハケットの脱退は大きな痛手だったのでしょうか、トニー・バンクスのキーボードがよりフィーチャーされたというのは、本誌的にはおいしいところかもしれません。「アンドートウ」では彼がメロウに弾くCPサウンドが曲の骨格になっていますし、「バラッド・オブ・ビッグ」のイントロではコーラスがきつくかかったCPサウンドを聴くことができます。また、DVD付きのリリース盤では、CPの上に置かれたモーグPolymoogと思わしきでかいシンセを弾いているライブ映像も観ることができます。ほかにもモーグのモジュラー・シンセをはじめ、さらにたくさんのキーボードをセッティングしている様子は壯観で、“当時のキーボーディストはお金がかかるんだろうな?”といらぬ心配までしていました。



ボ・ガンボス
『『すいきの涙』
～BEST OF BO GUMBOS
LIVE RECORDINGS～』

エピック:ESCB-2148

いやいやホントに素晴らしいCPプレイ。Dr.kyOnさんはピアノを並べて“クレイジーフィンガーズ”というユニットをやらせていただいてますが、一緒に弾いていると、筆者がブルースやジャズをルーツにしながらニューオーリンズのファンキーなピアノに出会っているのに対し、kyOnさんは全く反対側のロックからニューオーリンズ・ピアノに巡り会っている感じがひしむしして、そこにいつも格好良さを感じます。このボ・ガンボスのライブ盤ではニューオーリンズ・マナーの「魚ごっこ」やミディアム・スローなロック・ナンバーの名曲「夢の中」、また「あこがれの地へ」や有名曲「メス・アラウンド」をモチーフにした超高速ロッキン・ルーツ・ピアノ「見返り不美人」など、まさにCPを弾き倒した男の記録が鮮やかに録音されています。それでもライブでこれだけの勢いと完成度を両立させていたのは驚きです。勢いのあるバンドやキーボーディストを目指す方は、こういうCDを聴いてぶっ飛びましょう。スタジオ盤よりも勢いがあって、ボ・ガンボスが眞のライブ・バンドであったことを再認識させられます。



ゴダイゴ
『平和組曲／ゴダイゴ・ライヴ』

コロムビア:COCP-51098

1984年リリースの、ゴダイゴ3枚目のライブ・アルバム。「威風堂々」のメロディを楽曲中に取り込んだ超大作「平和組曲」で始まるこのアルバムは、まさに“CP名盤”でしょう。のっけからミッキー・吉野氏の叩き付けるような高速CPリフで始まるのですから、キーボーディストならずとも“鍵盤ってカッコいい”と思ってしまうこと請け合いです。ミッキー氏はCPをエフェクトせずに、ストレートな音色でプレイしているように聴こえますが、その分CPサウンドの特徴……というか樂器の特性がバンドの音楽性に見事にマッチしていて、爽快な傑作となっています。それにしてもミッキー氏のプレイのリズムと歯切れの良さにはノックアウトされますね。ほんとカッコいいです。ゴダイゴというバンドが素晴らしいライブ・バンドであること、そして生のバンド・サウンドのダイナミクスなど、ゴダイゴを知らない世代や、名前やヒット曲は知っていても実際の演奏をきちんと聴いたことのないミュージシャンやキーボーディストにぜひ聴いていただきたいアルバムです。CP以外のシンセ・ソロも抜群です。



オフコース
『Three and Two』

EMIミュージック・ジャパン:TOCT-25639

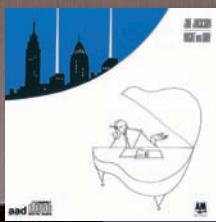
CPプレイヤーで最も有名なのは、なんといっても小田和正さんでしょう。オフコースのライブで小田さんは当時、CP-80をメインで弾いていたというのも有名な話です。CP-70が初めてその姿を見せたのが1976年、その後CP-80が投入されたことを考えると、新しいこの樂器の登場は、ロック的なアプローチに転換を計ろうとしていたオフコースに少なからずグッド・タイミングだったよう思うのは筆者だけでしょうか? なので、ライブ盤でもCPサウンドを堪能できますが、今回はまさに当時のオフコース転換期をとらえたスタジオ盤「Three and Two」を選んでみました。小田さんは1曲目「思いのままに」からCPを弾いています。また「汐風のなかで」や「愛あるところへ」もCPでしょう。弾き語り系のアルペジオ・パッキングや白玉のコード弾きにもCPが向いていることを見事に証明しています。それとは対照的に「その時はじめて」や「生まれ来る子供たちのために」ではローズを弾いており、CPとのニュアンスの違いも楽しめます。ちなみにこのアルバムではありませんが、皆さんご存じの「さよなら」もCP名演ですね。



ハービー・ハンコック
『V.S.O.P.／～ニューポートの追想』

ソニー:SICP-10071～2

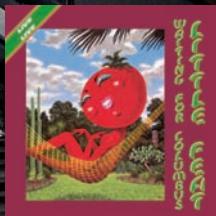
1976年6月のニューポート・ジャズ・フェスティバルでの“ハービー・ハンコックの軌跡をたどる”という特別企画で行われたコンサートの記録。ハービーの活動スタイルを時期で分け、60年代のマイルス・デイビス・クインテット時代と70年代に入ってからのセクスタン時代、そして70年代後半からの彼が最も先進的だったエレクトリック・ファンクな時代——この3つの異なるスタイルを一度のライブですべて表現しようとした画期的なライブです。そんなちょっと無謀と思える企画に彼が選んだ樂器がCPでした。今聴くと“なんてCPかな”と思わなくもないのですが……特に前半戦はアコビの方が… …とも。いやいや、彼のミュージシャンとしての自分を貫く姿勢というか、“俺は新しいことにいつでも貪欲なんだ”みたいな殺気に負けました。76年といえばCPがデビューした年。そこでこの新しい樂器を使って大観衆を前に臨んでいくハービーはやはりすごいとしか言いようがありません。特に後半になってくるとCPのエレクトリック樂器としての側面がうまく引き出されてグイグイと引き込まれる名演です。



ジョー・ジャクソン
『ナイト・アンド・デイ』

ユニバーサル:UICY-6624

こちらはある世代の人たちにとってはとてもなじみのある曲、ジョー・ジャクソンのヒット・チューン「ステッピン・アウト」が入ったアルバムです。82年にこのアルバムがリリースされて大ヒットを記録したころ、子供だった筆者もテレビや街でこの曲をよく聴いた記憶があります。そのころはジョー・ジャクソンとはどんなアーティストか全く知る由もありませんでしたが、大人になってからいろいろ聴いてみると、この人はほんとに好奇心の旺盛な、研究家肌の音楽職人であることを知りました。なんとこの人、出すアルバムごとに自分の探求する音楽性を変えているのです。パンク、ニューウェーブだったりレゲエだったり、ラテン・ミュージックだったり。そんな彼ですから楽器もいろいろと新しいものを探求したに違いありません。そんなわけでCPもすぐに導入したのではないのかと……。勝手な推測をしましたが、彼の大ヒット・ナンバー「ステッpin・アウト」では、CPサウンドが都会的でクールな曲のイメージを決定付けていることは間違ひありません。またこの曲のようなコード感や進行はほんとに80年代を感じさせますね。



リトル・フィート
『ウェイティング・フォー・コロンブス』

ワーナー:WPCR-75330~1

ルーツ・ミュージックを基礎にしながらCPを弾き倒した日本人がDr.kyOnさんだとしたら、アメリカではやはりこの人、リトル・フィートのビル・ペイン以外にいないでしょう。『ウェイティング・フォー・コロンブス』は“これでもか!”と言わんばかりのCPサウンドにあふれていて、フレーズ、展開、ソロのどれをとってもビルの個性が炸裂しています。なかでも超有名曲「ディキシー・チキン」では、それはそれは長い間奏部分にいろいろなモチーフやアイディアが次々に流れるように出てきて感心しきりです。やはり天才そして奇才。彼やザ・バンドのガース(・ハドスン)のようなミュージシャンが出てくるところにアメリカン・ルーツ・ミュージックの奥深さを感じずにはいられません。ビルの演奏は、CPのダイナミクスがアコースティック・ピアノほど広くないというところを逆手にとって、演奏をよりロック的に聴かせていると思います。演奏のダイナミクスが自然とそろうので、バンドの中でサウンドが抜けてくるのです。例えば中音域のトリルなどでもアコースティック・ピアノよりもCPの方がやはり存在感があって、間が持つように感じます。



キーン
『アンダー・ザ・アイアン・シー -深海-』

ユニバーサル:UICS-1109

現在CPに愛情を注いでいるミュージシャンといえば、日本では小林武史さん、そして海外ではこの人、キーンのティム・ライス・オクスリーでしょう。現状CPユーザーが非常に少數なのは残念ですが、個性を出すにはかえってCPの使用も狙い目かもしれません。ただし、メチャクチャ重い楽器なので相当な覚悟があるか、もしくは体力なら誰にも負けないと見える人か、もしくはすぐに駆けつてくれる後輩やスタッフがいると言いかれる人にオススメです。筆者も学生時代よく遊びましたが、これから運べと言われたらだいぶ引きます。キーンのティム・ライス・オクスリーのCPプレイはこれまで取り上げてきたいろいろなミュージシャンのCPプレイの良いところがいろいろ詰まっていますが、大活躍です。しかもこのアルバムには元音がCPとは思えないエフェクティブなプレイも満載。彼がこれからもCPをずっと弾き続けることを願っています。



サイモン&ガーファンクル
『セントラルパーク・コンサート』

ソニー:SICP-1540

とにかくこのアルバム自体がすごく好きなのですが、「明日に架ける橋」でリチャード・ティーが伴奏するCPが素晴らしい。CPをアコースティックに抑揚を付けて弾きこなすリチャードのプレイは必聴です。CPの中域のゴリゴリ感がよりこの曲をゴスペル・タッチに聴かせています。しかし、19曲にも及ぶロング・コンサートなのに、リチャード・ティーがCPを弾くのはなぜかこの曲1曲のみというのが謎です(映像で見ていないので、もしかしたら目立たないところで弾いているのかもしれません)……。ほかの曲では、リチャードのトレード・マークと言えるフェイザーのうねりを加えたエンダー・ローズを弾いています。もちろんその演奏も間違なく素晴らしいのですが、“せっかくあるのになんでもっと使わなかったの?”とか“ゴスペル・フィーリングを出すためアコースティック・ピアノのリクエストがあったのに、諸般の事情によりCPになったのです?”などと、ちょっと意地悪な想像もしますが、何はともあれCPを使った歴史的名演が生まれたので良かった良かった。



フォリナー
『ヴェリー・ベスト・オブ・フォリナー』

ワーナー:AMCY-10036

スプーキー・トゥースのミック・ジョンズやキング・クリムゾンのイアン・マクドナルドらがイギリス人とアメリカ人の混成メンバー6人で結成したロック・バンド、フォリナー。筆者もレコードが2枚くらい棚にあった気がしましたが、どこかに埋もれてしまったよう探し出せませんでした。そんなわけでちょっとフォリナーのことを忘れていたのですが(すいません)、今回CP特集ということでkyOnさんが何気にイチ押ししてくれたのがこのバンドでした。一時期は産業ロックなどと呼ばれてあまり聴かれないアルバムになってしまった時期もありましたが、今聴き返してみると、なるほど確かに入っています、CPサウンド。それも、王道のオーソドックスな8分打ちコードのCPプレイです。そうそう、こういうのを探していたんですよ。今回のCP特集では音源も制作しましたが、筆者の中で真っ先にCPプレイとして思い浮かぶのはやはりこういったスタイルの演奏でした。今回紹介したほかのどのアルバムよりも高音の透明感がより際立ったCPらしいサウンドで、シンプルな演奏を聴かせている「蒼い朝」はぜひチェックしてみてください。

Part 5

今CP音色をどう使う?

~Find your new style with CP sounds!~

工 レクトリック・グランド、“ヤマハCP”の名を聞くと、真っ先に思い浮かぶのはやはり“80s”という言葉です。時代は巡るという古今東西の慣例も無視するかのように、花火職人が何度も点火しているのに、相変わらず打ち上がらないのが80s!リババアルですが、ヤマハのCPという名機が80年代に最も脚光を浴びたスター的キーボードであることは今後も変わることはないでしょう。筆者も学生のころ——そのころはもう90年代で世間からCPは忘れ去られてはいましたが——学校のサークル室にはCP-70があり、たまに弾いていました。率直な感想は“なんて弾きにいいピアノなんだろう”。うまく表現しにくいのですが、鍵盤は重く、指に力を入れてもなんだかグニャッとした感じで、弾いているときの手応えがアコースティック・ピアノと全く別物でした。いろいろなりハスタやライブハウスにもピアノの代わりにCPが置かれていましたが、当時筆者は“ピアニ

ストになるんだ”と意気込んでいたので、CPを進んで弾こうとはしませんでした。なんとももったいないですね。今ならいろいろ実験してみたい奏法やエフェクトがあるのに。そういえば当時同じサークルにいた同級生の山本隆二くん（現在もプロデューサー、プレイヤーとして活躍しています）はよくCPを弾いていました。おかげでサークルの後輩たちはライブのたびにアップライト・ピアノとCPの両方を運ばれていたわけです。みんなごめんね。

時代は巡り、そんなCPのサウンドを自分が掘り下げるようになりました。実機を持っている人はなかなかいないでしょうから、今回はシンセなどに入っているCP音色が格好良く映える奏法を提案します。今回CPらしい演奏法を探し出す鍵となつたのは、学生のころに感じたアコースティック・ピアノとCPの特徴の違いでした。それでは用意した6つのパターンを解説していきましょう。

文・譜例作成:YANCY



撮影:Naomi Wada

PROFILE

シンガーソングライター。さまざまなアーティストのレコーディングやライブ・サポートのほか、アレンジャー・サウンド・プロデューサーとしても活躍。また、ローズ、ウーリッジ、ハモンド、アナログ・シンセなどビンテージ楽器のスペシャリストとしても知られている。ユニット“kotez&yancy”では独自のブルース、ニューオーリンズ・ピアノを聴かせる一方、ロック・ピアノ・プロジェクト“クレイジーフィンガーズ”ではDr.kyOnとともにピアノ合奏の可能性を探っている。ソロ名義2作目「TASOGARE-JO HN」が音楽フリーの間で話題沸騰中。オフィシャルWebサイト：www.yancy-piano.com/



ROCKキーボードの原点、8分打ちをCPサウンドで

CPはアコースティック・ピアノと違い、ミドルの音域がとにかく太いです。中音域はまるでシンセでいうところのデチューンをかけたように響きます。だからただひたすら8ビートを刻むのがとても似合うわけで、ピアノで弾くよりも断然ロック色がれます。余談ですが、こういう弾き方をするのであれば、足を開いて中腰で立ったまま弾く方がいいでしょう。ばかばかしいと思うかもしれません、なんでもカタチから入る方がいいと最近よく思うのです。だからもちろん、この譜例

を作成した日も自宅スタジオで1人で立って弾いていたのです。それはそれでちょっとむなしかったりしなくもないですが、言うからにはやらないといけないと思うわけです。それで人が見ていてもちゃんとやっておりました。おっと強調するところを間違えそうでした。話を戻して、トラック出だしの左手パート、クレッシェンドやアクセントの違いによるCPの低域の音のバリエーションに要注目です。最近の音源はかなり実機を再現していると感心します（ここではヤマハS90ES

のプリセット“HardCP80”を使用）。もう1つここで覚えておきたいのが、ロック的なパワー・プレイに向いているということは、裏を返せばジャジーなテンション・コードなどにはCPはあまり向いていないということ。実機でもシミュレーションものでも試してみるとすぐに分かるのですが、複雑なテンション・コードを両手で弾いたとしても、出音はオシャレにはほど遠く、なんだか報われない感じです。なのでCPはシンプルに弾き倒しましょう。



2

ドリーミーな広がりのあるCPサウンドでアルペジオ

Freely

Fm7(9)(onB⁹) 8va..... E^b B^b(onE^b) A^badd9(onE^b) B^b(onE^b) Cm7 B^b(onC) A^b(onC) Cm7

A^b△ A^b6 A^b A^b6 Fm7(9)(onB⁹) A△7(onB⁹) Fm7(9)(onB⁹)

E^b B^b(onE^b) A^badd9(onE^b) B^b(onE^b) B^b(onD) Cm7 B^b(onC) A^b(onC) Cm7 Cm7(onB⁹)

A^b△7 A^b6 A^b A^b6 Fm7(9)(onB⁹) A△7(onB⁹) Fm7(9)(onB⁹) E^b *poco rit.*

まずは譜例を弾いてみてください。う~んちよっと切なくなるような雰囲気ばっかりのアルペジオです。きっとピアノで同じように弾いてもこういう夢見心地でセンチメンタルな響きはしないでしょう。このコーナーはCPサウンドをもっと使いこなそうといった意味合いであります。これは筆者からの1つのアプローチ例です。CPは、全盛だった80年代もコーラスやディレイ、フェイザーなどいろいろなエフェクトが使われましたが、もともと楽器が持っているデチューン感をコーラスでさらに広げると、とても美味しい使い方ができます。アコースティック・ピアノにかけてみ

てもこうはなりませんから、こういった響きはCPの独壇場でしょう。シミュレーションものでも、内蔵のエフェクトで十分満足な音色と雰囲気が得られます。ここでも使用機材はヤマハS90ES。“HardCP80”というプリセットに、内蔵の“Symphonic”というコーラスをインサートしています。コーラスのかけ具合はとても重要です。また、このトラックの肝は、CPの楽器的特性を生かしているところ。もしこのフレーズをヤマハのDXエレピの音色で弾くとしたら、ちょっといやらしい、ベタな感じになってしまっててしまうでしょう。CPはあくまで打鍵ピアノなので、たとえキラキラ、シ

ュワシュワさせたとしてもピアノとしての芯が残っています。シミュレーションものでもそれは同じです。

それでもCPで弾くことでベタにならないギリギリのピンポイントを狙う、こういう小さな自己満足こそが醍醐味です（と筆者は思っています）。周りのプロ・キーボーディストもみんなそうですが、小さなポイントに異常なほどこだわりを見せるときがあります。それはそれでいろいろと面倒くさかったりもするのですが、そういうこだわりがミュージシャンの個性を強めていくような気もします。



Lover's Voice



小林武史

YAMAHA

Mr.Childrenのプロデューサーとして知られる小林武史も、ご存じのとおり“CP Lover”的な人。ライブなどで彼がCPを弾く姿を見たことがある人も多いはず。まずは小林がまたCPを使おうと思ったきっかけから聞いてみよう。

「(CPを)引っ張り出してきたきっかけは、UKのバンド、キーンが使っているのを見てですね」

現在CPを積極的に使用しているミュージシャンのうち、東の横綱が小林なら西の横綱がキーンのティム(・ライス・オクスリー)といった感じだが、そんな現代におけるCP愛用者としての小林があるのもキーンのおかげ？(ちなみにキーンのティムは次のページに登場しているのでぜひチェックを)

また、CPが聴けるオススメ名盤については、「僕はジョー・ジャクソンの『ナイト・アンド・デイ』というアルバムがベスト100……いや50かな?……に入るくらい好きで。そこで使われているピアノ・サウンドが全編CPなんだよね。すごく良いアルバムだと思います」

さてジョー・ジャクソンももちろん名盤だが、Mr.Childrenのニュー・アルバム「SUPER MARKET FANTASY」も忘れてはならない。「ピアノの半分くらいはCP」とのことなので、今後のライブ・ツアーでもCPが活躍することは間違いないだろう。そんなMr.Childrenのニュー・アルバムやライブを“CP目線”で楽しんでみるのも一興ではないだろうか。

2006年のap bank fes '06でヤマハCP-80Mを弾く小林





3

ルーツ・ミュージックをCPで

さて次はブギウギ、ロックンロール・タイプの曲です。“これをわざわざCPで弾くの?”と思われる方もいらっしゃるかもしれません、意外とCPで弾くとグルーブするのです。勢いが出るというか、ピアノで弾くよりもよりロッキンな感じが強くなります。筆者もオープニングで演奏させてもらったことがあるニューオーリンズ・ピアノの重鎮、ドクター・ジョンには全曲CPで弾き語っているアルバム『All by Himself』がありますが、それのブギウギなんかはものすごく勢いがあります。

これは気持ちがハイになるタバコ状のものでも吸わんとういう演奏にはならないでしょう……とかちょっと思ったりもしますが、とにかくイカしたアルバムです。90年代の日本で最も勢いがあったバンド、ボ・ガンボスのキーボーディスト、Dr. kyOnさんも当時ライブでCPを使い倒していました。筆者が学生のころ、学祭にボ・ガンボスが来たときはほんとカッコ良かったな……その際CPを使っていましたかどうか、肝心なところは忘れてしまいましたが、kyOnさんがなぜ当时CPを使

っていたかは今ならよく分かります。CPはとにかくロッキンなのです。ルーツ・フレーズが生きるロック・バンドにはまさにあっていいのです。さて譜例ではだいぶ速いテンポで弾いていますが、キーがCで、最もオーソドックスな転がるピアノ・フレーズなので、こういったスタイルに興味のある方はぜひトライしてみてください。初めはゆっくりのテンポで、左手ももっと簡略化してもいいでしょう。使用機材はヤマハMotif-Rack XS、プリセットは“CP1979”です。

©Richard Hughes

CP

Lover's Voice

3

Translation: Miki Nakayama

ティム・ライス・オクスリー from KEANE

●キーンの音楽ではCPをどのように使っていますか? 実際に使用したCPのサウンド・エフェクトの例を挙げてください。

「CP-70のもう1つのお気に入りの点がピックアップとアウトプット。これがおおかげでギターを弾くときのようにエフェクト・ペダルを通して音をプロセスすることが可能なんだ。2枚目のアルバム『アンダー・ザ・アイアン・シー -深海-』ではギターを弾く感覚でCP-70を使ったね。つまりCPの音をいろいろなエフェクトを通して、アグレッシブなサウンドからジミ・ヘンドリックスっぽいリフ、はたまた靈妙でアンビエントなパッド・サウンドまで幅広い音を作ったのさ。これは本当に楽しかったし、おかげでユニークでオリジナルなサウンドをたくさん見つけることができたんだよ。ライブではCP-70を普通のピアノを弾くように使っていて、よく出すのがとてもクリーンなピアノ・サウンドや本当にかすかに歪ませた音だ。本当に巨大な音だし、やっぱりデジタル・ピアノよりも格別にリアルなピアノ・サウンドの感じがすると僕は思うね」

●キーンのアルバム、なかでも最新作『パーフェクト・シンメトリー』に収録されている曲で、最もCP-70を効果的に使っているのはどの曲だと思いますか?

「CPは僕たちの最初の2枚のアルバムのほとんどで使われている。いい例としては「イズ・イット・エニー・ワンダー?」ではエフェクトをヘビーにかけたCPのリフが聴けるし、一方で「ブローケン・トイ」や「ザ・アイアン・シー」ではきれいなCPのアンビエント・サウンドが使われている(上述の3曲はすべて『アンダー・ザ・アイアン・シー -深海-』に収録)。新作ではタイトルトラック「パーフェクト・シンメトリー」の大きなエコーがかかったようなリフだね。このリフはCPの音が“どれだけ鳴り響くか”と、“ロック曲にも美しくフィットすること”を証明したい例だと思う」

PROFILE

vo, k, dによるギター・レスのスリー・ピースUKバンド。2009年2月には3rdアルバム『パーフェクト・シンメトリー』をリリースした。





4

80sな響きを持ち合わせたミディアム・ロックンロール

118

C7 F7 C7 F7

8va bassa

C7 F7 C7 F7 E^b F C (on G)

(8va bassa)

C E^b F C E^b F C E^b F C7

(8va bassa)

前項ではストレートなCPサウンドでブギ・ピアノを弾きましたが、今度は80年代の香りがブーンとするように内蔵のエフェクトをかけてみました。ここではヤマハS90ESのプリセット“Hard CP80”に、なんとフランジャーをかけてみました。フランジャーは内蔵の“FLANGER2”です。

導入のフレーズは80sをモロに意識。実は意外と80sのフレーズがすぐに浮かばず、自宅スタジオでしばらく頭をひねりましたが、CPサウンドをエフェクトしてこの音を見つけたら一気に80sの世界へ連れていかれました。そういうえば、ピアノを弾き語るシンガー・ソングライターというイメー

ジの強いランディー・ニューマンも80年代に入る
とこの手の音を使っていました。今、この音をう
まく使いこなせば、それはそれで新鮮に映るかも
しません。そういうたカラーを強く打ち出すキ
ーボーディストがさっそく現れたりしたらいいで
すね。



5

ジョー・ジャクソン 風都会サウンド

80sな雰囲気を持ったフレーズをもう1つ、シンセのプリセットにあるCPサウンドから作ってみました。ジョー・ジャクソンの大ヒット曲「ステッピン・アウト」は洗練された都会的雰囲気を持つ80年代を代表する曲ですが、その曲で彼は、CPのコード・バックingをバック・グラウンドに

しています。そんな80年代特有の雰囲気をシンセのCPサウンドで再現できるかをチャレンジしてみた結果、なんとも80年代風な演奏になりました。ここで気づいたことは、少し居心地の悪いコード感や分数コード的なアプローチにもCPは向いているということ。アコースティック・ピアノ

では、この“夜の都会”な感じは出ないでしょう。また、注目してほしいのは8ビートをオクターブ交互で弾いている左手。それはまるで無機質なシンセ・ベースのようにも聴こえます。このように、CPの持つ独特な低域のレゾナンス感は、工夫次第でいろいろな使い方ができそうです。



6 CPで弾き語る



最後に、“CPの音色を使って弾き語りをするのも、今なら個性的に響くのではないか”と思いま、ポップなコード・バックングをCPサウンドで弾く譜例を考えてみました。アコースティック・ピアノで弾くとありきたりに聴こえてしまいそうなこのフレーズ、CPサウンドだとあって新鮮に響くのではないかでしょうか。素のCPサウンドでは

いかにも味気ない感じがしたので、ここでは内蔵のエフェクトでフェイザーをかけています。使用機材はヤマハMotif-Rack XS、“CP70 Chorus”というプリセットをもとに、内蔵エフェクトは“VCM Phaser Stereo”的プリセット“E.Piano2”をインサートしました。ゆったりとしたフェイザーの大きなうねりが心地良く、太いア

タック感のあるCPサウンドによくマッチしていると思います。こういったバックングは、リズムをキープしながら表情を付けるのが意外と難しいので、ぜひ読者の皆さんもいろいろとトライしてみてください。弾きながら歌うというのもなかなか簡単なことではありませんが、練習しておいて絶対損はありませんよ!

CP音色演奏法総括

今回は譜例を作成の上、CP音色での演奏法のアイディアを探るということでしたので、フレーズや演奏スタイル的な観点からのアプローチを重要視しましたが、よりエレクトリックな音楽の中でクリエイティブにエフェクトを駆使しながらCPサウンドをリメイキングするといったこともトライしてみる価値がありそうで、ますますCPという楽器ジャンルの可能性を探ってみたいになりました。それにしてもCPの実機ちょっと欲しいな。でも置くとこないし。また欲しい病が出そうなのでこの辺で。

Look Back

1981年の
ヤマハ・キーボード・カタログ。
当時のカタログには
“キーボード”ではなく
“キイボード”と書かれていた。



『キーボード・マガジン
1981年10月号』の裏
表紙に掲載されたCP-
80の広告。これ以外に
も、本誌創刊当初か
ら、かなりの頻度でCP
シリーズの広告が登
場。

八神純子のトレード・マークと言えば白いCP。
当時のライブはもちろん、TV番組などで
彼女は特注の白いCP-80を弾いていた。



トッププレイヤーの感性に応える至高のタッチと磨き上げられたピアノ音色。
堅牢なボディに大出力ステレオスピーカーを搭載したプロフェッショナルモデル。



Rear Panel

STAGE PIANO CP300

メーカー希望小売価格￥270,900 (本体価格￥258,000)

JAN : 49 57812 33040 4

●3レベルダイナミックステレオサンプリング音源による圧倒的なアーリティ

CP300の音源部には3レベルダイナミックステレオサンプリング技術を採用したハイグレードなAWM音源を採用しました。たとえばダンパー・ペダル使用時の音色変化(サステインサンプリング)や、鍵盤から指を離した時の微妙な音の減衰状態(キーオフサンプリング)、さらにハンマー打弦時に他の弦が共鳴することで生まれる響き(ストリング・グレーナンス)までも忠実に再現するなど、アコースティックピアノのサウンドに極限まで肉薄したハイクオリティなピアノ音色を実現。

●ピアニストの繊細なタッチに応える高品位なGH(グレードハンマー)鍵盤を搭載
グランドピアノの鍵盤機構を徹底的に追求し、最上のタッチ感を実現したフルスケールGH鍵盤を採用。タッチ感と音色の卓越したマッチングを実現しました。

●豊富なピアノ音色に加えライブやバンドユースに最適な音色を内蔵

グランドピアノや様々なタイプのアコースティックピアノをはじめ、歴史的名機を再現したエレクトリックピアノやオルガン、さらにベースやストリングスなどステージユースに応える総計50音色を内蔵。特にグランドピアノ音色では大容量波形データを使用することで豊潤な響きを実現しました。バンドアンサンブルに最適な「モノピアノ」、芯が太い音像が特長の「コンピピアノ」など特にライブユースで活躍する音色を搭載。プリセットボイス用エフェクターには高品位なリバーブ、

ディレイ、コーラスなどに加え、独特的の音圧感を付加するコンプレッサーも搭載。

●迫力あるサウンドを体感しながら演奏できる高品位ステレオスピーカー

本体だけでモニタリングが行える高音質なステレオスピーカー搭載。30Wの大出力パワーアンプを内蔵した13cmスピーカーをピアノ音色に特化してチューンしました。スピーカーからの振動が楽器本体から鍵盤、そしてプレイヤーの指へと伝わりアコースティックピアノの演奏フィールに近い演奏性を提供します。

●ライブのために磨かれた128音ボリューム、64パフォーマンス、XLR端子

ペダルを多用しても余裕の128音ボリュームを実現。デュアル/スプリット設定、音色バラメーターやエフェクトセッティング、マスター設定、MIDI送受信チャンネルの設定などを一括して記憶する「パフォーマンス」を64種内蔵。さらにステージ上の誤作動を防ぐパネルロック、スピーカーのON/OFFがワンタッチで行えるSPEAKERスイッチ、低ノイズで信頼性の高いXLR端子、ライブパフォーマンスで役立つ様々な機能も搭載。XG音源内蔵の16TRシーケンサーも内蔵しました。

●ライブツアーに耐えるタフな外装・堅牢な外観デザイン採用

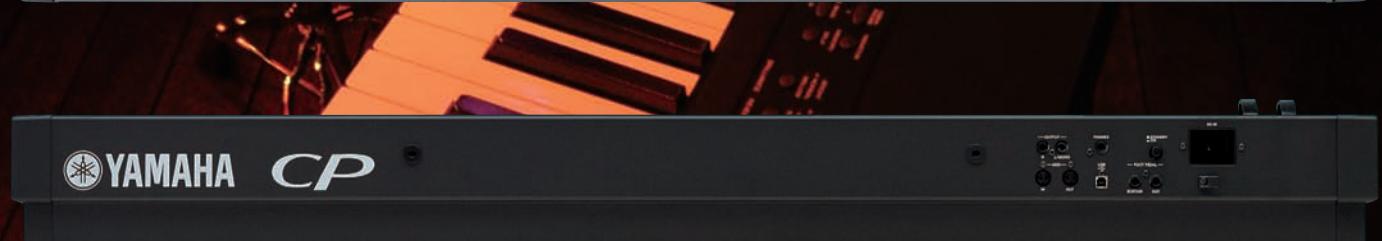
プロの過酷なツアーにも十分耐える堅牢なスラブスタイル(箱形)の外観デザインを採用。マットブラック塗装がステージで渋い存在感と精悍さを演出します。



XLR端子

ライブで生きる高品位なサウンドとリアルなタッチのGH鍵盤を搭載。

気軽に持ち運べるコンパクト&ライトウェイトなステージピアノ。



STAGE PIANO CP33

メーカー希望小売価格 **¥147,000** (本体価格¥140,000)

JAN : 49 57812 33292 7



●豊かな表現力を誇る3レベルダイナミックステレオサンプリング音源採用

タッチによる音色変化をリアルに表現するため、音源部にはペロシティの強弱によって1キーあたり3種類のサンプリングウェーブをコントロールする3レベルダイナミックステレオサンプリング技術を採用した高品位なAWM音源を採用。ピアニッシモからフルテッシモまでピアニストのタッチを鮮やかに音へと映し出します。

●ピアニストの繊細なタッチに応える高品位なGH(グレードハンマー)鍵盤

ピアニストにとって鍵盤とは、プレイヤーの感性をダイレクトに伝達するインターフェイス。そのタッチ感は演奏そのものを左右するといっても過言ではありません。CP33はグランドピアノの鍵盤機構を徹底的に追求し最上のクオリティを実現した88鍵フルスケールのGH鍵盤を採用。グランドピアノに特有の音域ごとの鍵盤の重みの違いをリアルに再現するプロクオリティの鍵盤タッチと3レベルダイナミクステレオサンプリング技術により、指先の感性に即応するタッチ感とステージピアノとして理想的な音色のマッチングを実現しました。



グレードハンマー鍵盤

●豊富なピアノ音色に加えライブやバンドユースに最適な音色を搭載

アコースティックピアノ音色から、歴史的名機を再現したエレクトリックピアノ音色など、多彩な28音色を内蔵。いずれもライブステージで「使える」ハイグレードなサウンドです。また、バンドアンサンブル演奏の中で威力を発揮する「モノピアノ」を搭載。音色の微妙なニュアンスを変更できるブリリアンス、リバーブ、コーラス、フェイザーなどのエフェクトはフロントパネルのスイッチにより設定可能。会場や演奏曲目にあわせてステージ上で簡単に変更できます。

●ライブステージのために強化された数々の機能を搭載

外部のMIDI音源やシンセサイザーなどをCP33からコントロールできるマスター機能を搭載。本体左側に装備された2本のスライダーにより、ボリュームなど任意のパラメーターをステージ上でリアルタイムにコントロール可能です。また、シンセサイザーなどの外部音源をコントロール可能なモジュレーションホイールとピッチベンドホイールも装備。マスターkeyボードとしても高いポテンシャルを誇ります。

●ライブにリハーサルに気軽に持ち運べるコンパクト&軽量設計

プログレードのサウンドやフルスケールのGH鍵盤を搭載しながら、ライブやリハーサルスタジオに気軽に持ち運べるコンパクト&軽量設計を実現しました。またUSB TO HOST端子を搭載し、自宅での音楽制作などのユースにも応えます。



CP300 Specifications

鍵盤	GH鍵盤 88鍵
音源	AWMダイナミックステレオサンプリング
最大同時発音数	128
音色数	手弾き用パネルボイス: 50 XGボイス: 480+12ドラムキット
パフォーマンス	64パフォーマンス×56ファイル
エフェクト	プリセットボイス用=リバーブ×5タイプ、コーラス×3タイプ、インサーションエフェクト×14タイプ(3系統)、5バンドマスターEQ XGボイス用(プリセット用ボイス含む)=リバーブ×24タイプ、コーラス×24タイプ、バリエーションエフェクト/インサーション×121タイプ
コントローラー	マスター・ボリューム・ダイアル、ピッチ・ペンドホイール、モジュレーション・ホイール、マスター・イコライザースライダー、ゾーン・コントロール・スライダー、ソング・ボリューム・スライダー
画面	24文字×2行、バックライト付LCD
シーケンサー	16トラック録音/再生、テンポ調節、最大112曲(1.4MB、140,000ノート)
接続端子	MIDI IN/OUT/THRU、PHONES(ステレオ標準フォーンジャック)、INPUT L/MONO R(標準フォーンジャック)、OUTPUT L/MONO R(標準フォーンジャック)、OUTPUT L R(XLR端子)、ASSIGNABLE FOOT PEDAL(SUSTAIN/SOSTENUTE/SOFT/AUX)、USB TO HOST、AC INLET
アンプ	30W×2
スピーカー	13cm×2
定格電源	100V
消費電力	48W
寸法(間口×奥行き×高さ)	1391×460×170mm
質量	32.5kg
付属品	取扱説明書、フットペダルFC3、電源コード、保証書



CP33 Specifications

鍵盤	GH鍵盤 88鍵
音源	AWMダイナミックステレオサンプリング
最大同時発音数	64
音色数	14×2バリエーション
エフェクト	リバーブ×4(ルーム/ホール1/ホール2/ステージ)、コーラス/フェイザー/トレモロ/ロータリースピーカー、プリリアンス(イコライザー)
コントローラー	マスター・ボリューム・ダイアル、ピッチ・ペンドホイール、モジュレーション・ホイール、ゾーン・コントロール・スライダー
接続端子	MIDI IN/OUT、PHONES(ステレオ標準フォーンジャック)、OUTPUT L/MONO R(標準フォーンジャック)、FOOT PEDAL(SUSTAIN/AUX)、USB TO HOST、DC IN 12V
定格電源	電源アダプターPA-3C
消費電力	8.0W
寸法(間口×奥行き×高さ)	1312×330×151mm
質量	18kg
付属品	取扱説明書、フットペダルFC3、電源アダプターPA-3C、保証書

Options

●ケース

LC-CP300F 99,750円(本体価格95,000円)

JAN: 4960693232774

CP300用フライテース(1,545W×230H×635Dmm・17kg キャスター付)

LC-CP300H 84,000円(本体価格80,000円)

JAN: 4960693232767

CP300用ハードケース(1,545W×225H×630Dmm・14kg キャスター付)

LC-CP33H 47,250円(本体価格45,000円)

JAN: 4960693232873

CP33用ハードケース(1,452W×200H×448Dmm・11kg)

●キーボードスタンド

YAMAHA PRODUCTS

KEYBOARD STAND

LP3 16,800円(本体価格16,000円)

JAN: 4960693106020

CP300用

(1,337.8W×

647.7H×

400Dmm・8.9kg)



KEYBOARD STAND

LU80X 9,975円(本体価格9,500円)

JAN: 4960693233078

CP33用

(660~844Hmm・5.7kg)

許容重量68kg



ULTIMATE PRODUCTS

KEYBOARD STAND

IQ2000 10,395円(本体価格9,900円)

JAN: 0784887140348

安定度の高いダブルフレイズを採用したスタンド

(680~910Hmm・5.5kg) 許容重量68kg



※ULTIMATE製品のお問合せ先:

ヤマハミュージックトレーディング株式会社

TEL.03(5641)1031



感動を・ともに・創る

ヤマハデジタル楽器/コンピューターミュージック製品ウェブサイト
<http://www.yamaha.co.jp/product/syndtm/>

ヤマハのデジタル楽器/コンピューターミュージック関連製品のウェブサイトです。製品の情報、最新OSへの対応情報、ソフトウェア/ドライバーのアップデート情報などを満載しています。

仕様や取扱についてのお客様お問い合わせ先

お客様コミュニケーションセンター 音楽制作機器相談窓口

ナビダイアル **0570-015-808**

携帯電話、PHS、IP電話からはTEL. **053-460-1666**

月～金 10:00～18:00／土 10:00～17:00 (日曜・祝日・センター指定休日を除く)
http://www.yamaha.co.jp/support/musical_products/form.html

取扱店に関するお問い合わせ先

EKB・LM営業部 東日本営業所 〒108-8568 東京都港区高輪2-17-11 TEL.03-5488-5471

EKB・LM営業部 中日本営業所 〒460-8588 名古屋市中区錦1-18-28 TEL.052-201-5199

EKB・LM営業部 西日本営業所 〒542-0081 大阪市中央区南船場3-12-9
心斎橋プラザビル東館 TEL.06-6252-5231

ヤマハ株式会社

EKB・LM営業部 営業推進室 〒108-8568 東京都港区高輪2-17-11 TEL.03-5488-5430

PA・DMI事業部 DMIマークティング部 〒430-8650 静岡県浜松市中区中沢町10-1

音楽を楽しむエチケット

楽しい音楽も時と場合によっては、大変気になるものです。特に、夜間は小さな音でもよく通り、思わずところに迷惑をかけてしまうことがあります。適度な音量を心がけ、窓を閉めたりヘッドフォンを使うなど、お互いに心を配り快適な生活環境を守りましょう。

ご使用の前に、取扱説明書に記載されている安全や取扱いに関する注意事項をよくお読みください。



このカタログは無塩素漂白
(ECF)バルブを使用し、大豆
油インキで印刷しております。

2009年6月作成 カタログコード **DE1182**